

18世紀ドイツ語圏における句読法とその翻訳可能性（2）

J. G. ヘルダーにおける句読法

Interpunktion in den deutschsprachigen Ländern im 18. Jahrhundert (2)

Zeichensetzung bei Johann Gottfried Herder

宮谷 尚実

MIYATANI Naomi

ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの著作、特に『言語起源論』で用いられた各種の補助符号を手がかりとして18世紀ドイツ語圏における句読法の一断面を明らかにする。その際、同時代の言語学者であり近代ドイツ語正書法の整備に貢献したヨハン・クリストフ・アーデルングによる句読法手引に記された符号の種類や使用法を参照することで、当時の句読法をめぐる状況からヘルダーの句読法を読み解いていく。ヘルダーの『言語起源論』には自筆稿や清書稿、初版と第2版という諸段階があり、そのプロセスで変更された符号もある。その後の複数の校訂版において補助符号がどのように変更されたかを比較検討し、さらに日本語訳において句読法をいかに「翻訳」できるのかという問題についても考察する。

キーワード：ヘルダー、句読法、補助符号、文体、18世紀ドイツ語圏

1 はじめに

2020年に生誕250年を迎えたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（Ludwig van Beethoven、1770～1827年）の「日記」には、18世紀の思想家ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried Herder、1744～1803年）の著作からの一節が記されている。

Lerne Schweigen[,] o Freund. Dem Silber gleicht
die Rede[,] aber zu rechter Zeit Schweigen ist
lauteres Gold. ⁽¹⁾

沈黙を学べ [,] おお友よ。銀に似たるは
語り [,] だが相応しき時に黙するは
純金なり。

1813年の記載があるページに書かれたこの詩をもとに、ベートーヴェンは謎カノン *Das Schweigen* 〈沈黙〉（WoO168/1）を1816年に作曲する ⁽²⁾。

【譜例】 ベートーヴェン 〈沈黙〉

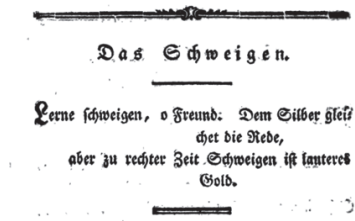


この曲の楽譜や音源には、この詩が「ヘルダーによる」と書かれている。だが、厳密に言えばヘルダーが編集した『みだれ草紙』第4集（*Zertreute Blätter. Vierte Sammlung*, 1782年）に収められた、13世紀に活動したイランの詩人サアーディ（Saadi, 1210頃～1292年）による教訓的詩や警句のうち的一篇である。ただし、ヘルダーはバルシア語から直接訳したわけではなく、すでに翻訳されたサアーディの作品をもとに自由に創作した翻案なので、その点ではサアーディではなくヘルダーの作品と言って差し支えないかもしれない ⁽³⁾。

ヘルダー『みだれ草紙』第4集の「沈黙」⁽⁴⁾を、初版に掲載されたまま、改行もそのまま転記すると次のようになる。

Lerne schweigen, o Freund. Dem Silber glei=
chet die Rede,
aber zu rechter Zeit Schweigen ist lauterer
Gold.

【図版1】ヘルダー『みだれ草紙』第4集初版「沈黙」



ここには現代とは違う符号使用の特徴がいくつか現れている。親称の2人称単数にたいする命令形 (lerne) のある命令文の末尾には感嘆符 (!) を現代であれば置くが、ここではピリオドが用いられている。また、1行目最後の分級記号「=」(正確には右上方向に斜めの記号)には現代であればハイフン「-」を用いる。こうした補助符号はいずれもそれ自体には「読み」がなく、単語の発音への影響も統語論的な影響もないため、書き写したり、版が変わったり、あるいは著者本人の推敲のプロセスで表記揺れや変更が生じることも多い。たとえば、1文目の命令文は、後にベートーヴェンの楽譜で „[...] o Freund!“ と感嘆符が付されることになる⁽⁵⁾。だが、ベートーヴェンも『日記』で転記したとおり、ヘルダー『みだれ草紙』にあるピリオドのままのほうがむしろ抑制された「教訓」のニュアンスがでる。その結果、「黙するを学ぶのだ、おお友よ。」と論するような調子の日本語訳も可能になるだろう。ブライトコプフ版で括弧書きされた演奏指示 „Ziemlich ernsthaft.“ 「かなり真剣に。」の解釈の可能性も広がるのではないだろうか。句読点や補助符号は、発音されないいわば沈黙の記号であるが、それだけに一層注目される。

以下では、ヘルダーにおける句読点や補助符号の使用法を同時代の句読法の手引書も参照しつつ分析を試みる。前述したように、執筆や推敲のプロセスにおいても、執筆時期によっても句読法には揺れが起こることから、今回はさまざまな時期の著作を比較することはせず、ヘルダーによる複数の自筆稿と別の人物による清書稿があり、初版だけでなく第2版も刊行され、さらに複数の校訂版や日本語訳の比較検討が可能な『言語起源論』(初版1772年)を分析対象とする。

2 アーデルングによる句読法手引

18世紀におけるドイツ語句読法の代表的な例として、ヨハン・クリストフ・アーデルング (Johann Christoph Adelung, 1732 ~ 1806年) を挙げる⁽⁶⁾。

ギムナジウムでの教育活動を経て、ライプツィヒで文筆家かつ編集者として活動したアーデルングは、1774年から1786年にかけてブライトコプフから5巻からなるドイツ語辞典⁽⁷⁾を出版した。そのアーデルングが1781年以降にまとめた文法書や正書法に関する3冊の著作⁽⁸⁾にはいずれも句読法の解説が含まれている。そのうち最後の『ドイツ語正書法完全手引』(Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie, 1788年、以下『完全手引』)の記述が最も詳しい。

アーデルングは『完全手引』の句読法に関する部分 (S. 360以下)の冒頭で句読法の意義を述べる。句読点や補助符号は、その文の要素の区切りを明らかにしたり筆者の心情を明確に示したりするので、それらの符号を適切に用いることは読み手にとっての「容易な理解 (leichte Verständlichkeit) を助ける」⁽⁹⁾という。この『完全手引』第5部「正書法的符号 (orthographische Zeichen) について」は、3つの章によって構成されている。当時、どのような符号が用いられ、それらをアーデルングがどのように分類したかを概観するため、以下にリストアップする。

第1章「心情を示す符号について (Von den Zeichen der Gemüthstellung)」

- ・疑問符 Fragezeichen (?)
- ・感嘆符 Ausrufungszeichen (!)

これらをアーデルングは、心情によって「生き生きとした声 (lebendige / lebhaftige Stimme)」になることを視覚的に表す符号としている⁽¹⁰⁾。

第2章「概念を分ける符号または区分符号について (Von den getrennten Begriffen oder den Unterscheidungszeichen)」

- ・ピリオド Schluß=Punct [sic] (.)
- ・コロン Kolon (:)
- ・セミコロン Semikolon (;)
- ・コンマ Komma (,)
- ・括弧 Parenthese ()
- ・ダッシュ Gedankenstrich (—)

話しているとき、語のまとまりごとの間ではほぼ知覚できないほど小さな休止 (eine fast unmerklich kleine Pause)⁽¹¹⁾をしている。あるいは語の結びつきや区切れが大小の休止によって示唆される。それらの休止を可視化 (dem Auge sichtbar) する符号である⁽¹²⁾。

第3章「個々の音節や綴り字の符号について (Von den Zeichen einzelner Silben und Buchstaben)」

- ・ハイフン Binde= und Theilungszeichen (=, -)
- ・分音符号 Puncta diaereses (¨) ⁽¹³⁾
- ・アポストロフィー Apostroph (')
- ・引用符 Anführungszeichen („) ⁽¹⁴⁾

数字のあとに用いられる符号についても項目があり、アーデルングは数字の後にはピリオドと同じ記号をいくつも使わない方が良く考えている⁽¹⁵⁾。

以上、①生き生きとした音声や心情を表現するための符号、②区切りのための符号、③音節や綴り文字に関する符号というカテゴリーは、『完全手引』以外のアーデルングの句読法に関する記述にも共通する⁽¹⁶⁾。それらは3冊とも1780年代に出版されたが、それまで刊行された出版物等にあらわれた言語現象を反映しているので、初版が1774年に出版されたヘルダーの『言語起源論』における句読法を検討する際の有力な参考情報になると思われる。

3 ヘルダー『言語起源論』における句読法

ヘルダーの『言語起源論』には4種類の自筆稿が存在する。そのうちヘルダーの手稿は3種類で、最後は懸賞課題に答えてベルリン・アカデミーに提出された清書版である。1774年にはヘルダー自身が校正作業には携わっていない初版がアカデミー経由で出版され、その15年後、ヘルダー自身が加筆修正した第2版(1789年)が出版された。その後の代表的な校訂版はズプハン全集版(1891年)、レクラム文庫版(1966年)、フランクフルト選集版(1985年)、ハンザー版(1987年)である⁽¹⁷⁾。本稿では、アーデルングの分類に従って『言語起源論』初版における句読法を例示し、手稿やその他の版や翻訳との顕著な差異について考察を加える。

3-1 心情を表す符号

3-1-1 疑問符

言語は神から授けられたのか、あるいは人間自身が発明したのかという問いに答えるべく書かれたヘルダーの『言語起源論』は2部からなり、それぞれに見出し文が付されている。そのいずれにも疑問符が付されている。

(第1部)

Haben die Menschen, ihren Naturfähigkeiten überlassen,

sich selbst S p r a c h e erfinden können? (S. 1) ⁽¹⁸⁾

人間は、その自然能力に委ねられて、みずから言語を発明することができたか?

(第2部)

Auf welchem Wege der Mensch sich am füglichsten hat S p r a c h e erfinden können und müssen? (S. 141)

どのような方法で人間は最も適切に言語を発明することができ、あるいは発明せざるを得なかったのか?

この部分はヘルダーの自筆稿でも清書稿でも欠けている⁽¹⁹⁾。ベルリンの学術アカデミーの懸賞課題の一部であり、そのフランス語ですでに疑問符がある⁽²⁰⁾。ベルリン・アカデミーが初版出版時にタイトルページ同様ドイツ語で追加した可能性が高い。それでも本文の前ですでに用いられた疑問符はヘルダーの『言語起源論』の文体の特徴をよくとらえている。読者に対して問いかけるような、反語的かつ挑発的な疑問符で終わる文は『言語起源論』に非常に多いからだ。

たとえば、ヘルダーがヨハン・ペーター・ズュースミルヒ (Johann Peter Süßmilch, 1707 ~ 1767年) の言語神授説⁽²¹⁾に反論する部分でも疑問符を伴った文をたたみかけるように繰り返し用いている。ここでは紙面の都合上、疑問符を反映させた訳のみ掲載する。

神からの教示がなければ理性も言語もない—そうやって我々はいったいどこに行き着くのだろう? 人間に理性がないなら、神からの教示によってどのようにして言語が学べるというのだろう? それに、人間は言語なしでは理性をいささかも使用することができない。ということは、人間は言語を持っているというのか、それを持つ以前に、あるいはそれを持つことができるより前に? はたまた理性的でありうるとでもいうのか、理性を自分ではいささかも使わないのに? ⁽²²⁾

修辭的かつ論争的な疑問符の使い方⁽²³⁾であり、「生き生きとした声」で問いかける代わりに読者への視覚・聴覚的效果が期待される。

3-1-2 感嘆符

ヘルダー『言語起源論』では、感嘆符の多用が顕著である。初版では見開き1頁につき少なくとも1回は感嘆符が目飛び込んでくるといっても過言でない。

Erfindung der Sprache ist ihm also so natürlich, als er

ein Mensch ist! Lasset uns nur beide Begriffe entwickeln!
Reflexion und Sprache — (S.52)

したがって、人間が人間であるのと同じように、言語の発明も人間にとっては自然なことなのだ！両方の概念をとまかく展開してみよう！反省機能と言語を—

「言語の発明は人間にとって自然である」という内容を述べるのに感嘆符を付けると、視覚的に強い主張というニュアンスが加わる。初版では太字が付されていないが、自筆稿ではこの1文目の全体に強調下線が引かれ、さらに感嘆符がある⁽²⁴⁾ことから、感情の高まりがより強く示されていた。

しかし、論文でなぜこのような「心情」や「生き生きとした声」をあらわす補助符号がうるさいほど用いられたのだろうか。たとえばズースミルヒの『証明の試み』(1766年)では、疑問符は使われているが、感嘆符はない。タイトルに明記されているようにズースミルヒはアカデミーの集会で実際にこの原稿を読み上げている。だが、ヘルダーは『言語起源論』を送付しているので読者である審査員に文面から視覚的に強く訴えかける必要がより強かったのかもしれない。それにしてもアカデミーに提出する論文でありながら「心情を表す符号」を濫用といえるほど多用して個人的な心情を前面に出すこの文体は、学術論文というよりもヴァーチャル講演であり、18世紀後半の多感主義文学作品に近い。

3-2 区切るための符号

3-2-1 ピリオド

アーデルングは1782年の句読法手引では、ピリオドは文と文を分けるために用いて「語りのなかで新鮮な空気を吸うところで」置くとしているが、1788年の『完全手引』では「強い休止 (starke Pause)」という表現を使っている⁽²⁵⁾。

『言語起源論』最終章から、ピリオドの効果が明確な部分を引用してみよう。

Der höhere Ursprung ist, so fromm er scheine, durchaus ungöttlich: Bei jedem Schritte verkleinert er Gott durch die niedrigsten, unvollkommensten Anthropomorphien. Der menschliche zeigt Gott im größten Lichte: sein Werk, eine menschliche Seele, durch sich selbst, eine Sprache schaffend und fortschaffend, weil sie sein Werk, eine menschliche Seele ist. Sie bauet sich diesen Sinn der Vernunft, als eine Schöpferinn, als ein Bild seines Wesens. Der Ursprung der

Sprache wird also nur auf eine würdigste Art göttlich, sofern er menschlich ist. (S. 221)

高次の起源は、いかに信心深く見えても、まったく神格的ではない。一歩進むごとに、それはきわめて低俗で、極めて不完全な人間化によって、神のことを卑小なものにしてしまう。人間的起源は神を最も大いなる光の中で示す。神の業である人間の魂がみずからを通じて言語を創造することによって。また、言語が彼の業であり、人間の魂であるがゆえに言語を創造し続けることによって。人間の魂は、一人の創り手として、神の本質の似姿として、理性のこの感覚器官をみずから造る。言語の起源は、それが人間的である限り、それにふさわしい方法で神格的である。

まずズースミルヒによる神授説（「高次の起源 (der höhere Ursprung)」) について述べる2つの文を終えた区切りではじめてピリオドが置かれる。ヘルダー自身の人間起源説（「人間的起源 (der menschliche Ursprung)」) について述べる前にピリオドで「強い休止」が置かれることで、そのふたつの説の対比が明確になる。この引用の直前の段落も自筆稿段階ではまったく同じ構造である⁽²⁶⁾。

3-2-2 コロン

アーデルングの『完全手引』では、コロンは声に出したときにピリオドに次ぐ「〔ピリオドに〕次いで最も強い休止 (die stärkste Pause)」で、前の文と次の文を分ける働きをすると書かれている⁽²⁷⁾。前項(3-2-1)の引用文でも、ズースミルヒの説に関する部分はピリオドまでに2文により構成されているが、文と文がコロンの区切られている。

あるいは、次の引用のように現在であれば je ~, desto ... (「~であればあるほど、ますます...」) はコンマで区切る⁽²⁸⁾が、ここではコロンの区切られている。

Je lebendiger eine Sprache; je näher sie ihrem Ursprunge, und also noch in den Zeiten der Jugend und des Wachsthumis ist: desto veränderlicher. (S. 190)

ある言語が生き生きとしていればいるほど、それが起源に近ければ近いほど、つまり青年期や成長期であればあるほど、それだけいっそう変化しやすい。

3-2-3 セミコロン

セミコロンは、コロンとコンマの間であり、コンマと比べて「より強い休止 (eine stärkere Pause)」を、そしてコロンと比べて「より弱い (eine schwächere)」

休止を表す、とアーデルングはまとめている⁽²⁹⁾。

前項(3-2-2)の引用では „Je lebendiger eine Sprache“ の後、いったんセミコロンで休止し、 „je näher sie [...] ist“ と je + 比較級を繰り返している。文が終わっていないのでコロンにはならない。ここでコンマにしては区切りが弱くなってしまふ。アーデルングが『完全手引』で述べるところの、2つの部分からなる文で、片方がさらにいくつかの文肢からなる場合の区切りとしてのセミコロンの用法⁽³⁰⁾と理解できるだろう。

Die geschlagne Saite thut ihre Naturpflicht: — sie klingt! sie ruft einer gleichfühlenden Echo; selbst wenn keine da ist, selbst wenn sie nicht hoffet und wartet, daß ihr eine antworte. (S. 4)

この打ち鳴らされた弦はみずからの本来の義務をなす。—すなわち、響くのだ! 同じように感じてくれるエコーへとそれは呼びかける。たとえそこに誰もいないとしても、たとえ誰かが答えてくれることを望みもせず、待ちもしないとしても。

この箇所は第2版で符号に変更が加えられている。

Die geschlagne Saite thut ihre Naturpflicht: sie klingt; sie ruft einer gleichfühlenden Echo, selbst wenn keine da ist [...].⁽³¹⁾

初版のダッシュは一種の誤植だった。ヘルダーが自筆稿で他の語を消した削除線の部分に清書稿では横線がうすくある。だが清書稿の他の部分のダッシュとは明らかに線の太さが違う。そこで第2版でヘルダーはダッシュを削除し、繰り返し部分で先ほどの引用箇所同様に感嘆符のかわりにセミコロンを配したのだろう。第2版全体の傾向としてヘルダーは感嘆符をピリオドへ変更しているが、ここは文の途中なのでセミコロンになっている。

3-2-4 コンマ

アーデルングによれば、コンマは声に出して表現するときの「最も弱い休止 (die schwächste Pause)」を表し、個々の概念や文要素を区切るときに用いる⁽³²⁾。

これまでの引用文でも、同格など文要素の言い換え、挿入句の前後、主文と副文の間にコンマが用いられている。ここではヘルダー『言語起源論』冒頭の文を例として挙げる。

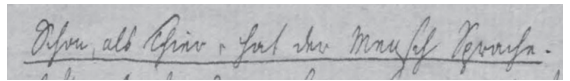
Schon als Thier, hat der Mensch Sprache. (S. 3)

動物として、人間はすでに言語を持っている。

この初版にあるコンマは、現在最も入手しやすく学校教材にも用いられるレクラム版にはない⁽³³⁾。初版だけでなく、レクラム版も底本としている校訂版(ズプハン版)にもこのコンマはある。しかし、レクラム版はヘルダーの句読法を特に注記することもなく「現代の使用法に合わせて」変更しているのである⁽³⁴⁾。たしかに「動物として人間はすでに言語を持っている」でも意味は通じる。だが、ヘルダーは明らかにここで「休止」を指示したのだ。

この箇所のコンマにはもう1点問題がある。ヘルダーの自筆稿の第3稿では „Schon, als Thier, hat der Mensch Sprache.“ と「動物として」の前後にコンマが付されていたのだ⁽³⁵⁾。

【図版2】 ヘルダー自筆第3稿冒頭



(Nachl. Herder Ka. 2, Mp. 3, Bl. 1r.)

それにより、副詞 schon のかかりかたの解釈が変わる可能性が生じる。„schon als Thier“ 「すでに動物として」のまとまりなのか、„als Thier“ 「動物として」のまとまりなのかの区切りの違いである。後者であれば schon は「人間は言語を持っている」のほうにかかる。この文の解釈はヘルダーの人間観⁽³⁶⁾に関わるので、コンマ1つのことではあるが無視はできない。

3-2-5 括弧

括弧には、文に語句や文を挿入する機能がある。アーデルングは『完全手引』で丸括弧 () と角括弧 [] の2種類を挙げているが通常は丸括弧を用いる⁽³⁷⁾。

『言語起源論』では、ヘルダーの独り言のような部分で括弧が用いられている。

Selbst die feinsten Saiten des thirischen Gefühls (ich muß mich dieses Gleichnisses bedienen, weil ich für die Mechanik kein besseres weiß) — [...] (S. 4)

動物の感情のうち最も繊細な弦(感情を持つメカニズムにもっと向いている比喩をしらないので、この喩えを使うしかないのだ!)

実際の講演であれば、声を落としているようなイメージだが、アーデルングも括弧は「休止ではなく、声を弱く変えた」ことを示す⁽³⁸⁾と説明している。

本文にコメントを差し挟むような、同様の挿入文は「触覚が主要感覚器官なのであれば（そんなことがあるなら、だが!）」(S. 100)や、「その言語は（我々にはおよそ想像できないが!）」(同上)のように、論敵の主張を述べる文の中で感嘆符を伴い、心の中の声で野次を飛ばしているかのようにも用いられる。

3-2-6 ダッシュ

ヘルダー『言語起源論』の符号のなかでダッシュは感嘆符と並んで多用されている。平均して2頁に一度は現れる。初版では本文の締めくくり(S. 221)にも4つ連続するダッシュが用いられ、著作全体もダッシュ3つで終わる(S. 222)。論文の締めくくりとしては異例である⁽³⁹⁾。

アーデルングによれば、ダッシュは「近頃になってからイギリスから借用された」ものだという。標準的な—だけでなく、---、…、=== という符号でもあり得る。①省略、②中断、③ピリオドよりも「強い休止」、以上3点が用法としてあげられている⁽⁴⁰⁾。

ここで特に注目したいのは、ダッシュの「並々ならぬ注意力をもって熟考(überdenken)するよう読者に指示する」⁽⁴¹⁾強調機能である。他の符号のように実際に話している場面を想定すると、話者の声量や休止の強弱というよりも、話者が黙る以上に聴き手をより深い沈黙と思考へと促す符号といえるだろう。

たとえば『言語起源論』のヘブライ語に関する記述の部分でもダッシュが用いられている。

Bei uns sind die Vokale das Erste und Lebendigste und die Thürangeln der Sprache; bei jenen werden sie nicht geschrieben — Warum? — Weil sie nicht geschrieben werden konnten. (S. 17)

我々のもとでの母音は、言語のうち最初のもの、最も生き生きとしたもの、言語というドアにとっての蝶番である。だが、彼らのもとでは、母音は書き表されな—なぜだろう?—書き表されえなかったからだ。

ズースミルヒのようにアカデミーで講演したのであれば、ヘルダーはここで口をつぐんで聴衆を見わたしたり、聴衆に答えを考えさせたりするために充分に間をとったのではないだろうか。

ダッシュに関して他の極端な使い方は、文を途中で

ぶつ切り中断してしまう用法である。たとえば第1部の第1章最終文は接続詞「しかし」に続くダッシュで中断する。

Es müssen statt der Instinkte andre verborgene Kräfte in ihm schlafen! stummgeboren: aber — (S. 38)

本能のかわりに他の隠された力がその子のなかに眠っているに違いない! 口がきけない状態で生まれた。しかし—

「しかし」の後に何が来るのか、読者は「並々ならぬ注意力をもって熟考」しながら頁をめくり、第2章へ読み進めることになる。これは日本語の三点リーダー「…」で示されるような曖昧な余韻とは質が異なる。また、ヘルダーはダッシュを1個だけではなく、2個、3個と連続させることも少なくないし、1頁にその全てのバリエーションが現れることもある(例えばS. 14, 108)。アーデルングは連続ダッシュについて言及していないが、1個の場合よりも連続している方が沈黙・熟考指示の視覚的効果がより強くなる。ヘルダーの『言語起源論』の最終文が自筆稿から一貫して3つのダッシュで締めくくられているのは、アーデルングを参考にすれば、ピリオドよりも「強い休止」によって読者にさらなる熟考を強く促しているからだと解釈できる。

3-3 音節や綴り文字に関する符号

3-3-1 ハイフン

アーデルングはハイフン(「= または -」)を「結合・分離符号(Binde= und Teilungszeichen)」と呼んでいるが、まさにこの名称のなかに「結合」符号としてのハイフンが含まれている⁽⁴²⁾。Bindezeichen、Teilungszeichenのように語要素の一部が重複するときには、Binde=とハイフンを用いることでZeichenの部分で「黙っている(verschweigen)」ことができるという⁽⁴³⁾。

アーデルングの『完全手引』でも、ヘルダー『言語起源論』初版でも用いられているのは現在のハイフン(-)ではなく、二重のハイフンである。レクラム版等、最近の校訂版では一重のハイフンに変更されている。

『言語起源論』初版では分綴符号としてでなければ、アーデルングで挙げられた以外の機能を持つ符号として用いられている。一例を初版の通りに改行して引用してみる。

So kühn es klinge, so ists wahr = der Mensch em=

pfindet mit dem Verstande und spricht, in=
dem er denkt, [...] (S. 154)

大胆に響くかもしれないが、真実である = 人間は悟性によって感じ、考えることによって話す〔後略〕。

行末の二重ハイフンはページレイアウトの都合上の分綴符号である⁽⁴⁴⁾。だが、1行目の「真実(wahr)である」の後の二重ハイフンは一部を黙っておいて次の語と結び付いているわけではなく、結合・分離いずれの符号でもない。ヘルダーの自筆稿、清書稿、初版まではこの符号が用いられていたが、第2版ではヘルダーがダッシュではなくコロンに置き換え、それをズプハン版もレクラム版も踏襲している⁽⁴⁵⁾。清書稿までは明らかにコロンとの区別がつくような二重ハイフン符号なので、コロン以上、ダッシュ以下の「区切るための符号」に新たに追加して分類すべき符号である。

アーデルングはダッシュに = = のバリエーションもあるとしていた(本稿3-2-6)が、ヘルダーには上記のように二重ハイフン1個、あるいは2個の場合もある。

Die Regeln der wahren Sprachdeduktion, sind auch so fein, daß wenige = = doch das ist alles nicht mein Werk [...]. (S. 212)

真の言語演繹法の規則は非常に洗練されているので、ごく少数の = = いや、これはすべて私の仕事ではない〔後略〕。

この符号の用法は、「ごく少数の」と言いさして文を途中でやめる「中断」であり、アーデルングはダッシュの用法として挙げていた。実際、ヘルダー自身も第2版ではダッシュに変更している。しかしズプハン版は二重ダッシュを2個そのまま残し、その一方でレクラム版は現代では用いられないこの記号をダッシュに変更している⁽⁴⁶⁾。

3-3-2 分音符号

この符号はヘルダー『言語起源論』では用いられていない。

3-3-3 アポストロフィー

『完全手引』で挙げられているアポストロフィーの用法は固有名詞2格の語尾に付けられるsと関係するもの、あるいは人称代名詞esなどのeの省略を表すものである⁽⁴⁷⁾。ヘルダー『言語起源論』には人名の

2格のsの前にアポストロフィーを用いる現象は英語名に限られる(S. 75、「チェセルデンの『解剖学』(Cheselden's Anatomy)」。また、本来は[...] ist esである„ists“のようにesのeの省略にもアポストロフィーを用いない(S. 37, S. 154など、あるいは本稿3-3-1の引用文)。このeの省略自体をアーデルングは「打ち解けた文体あるいは文学的な文体でしか用いない」⁽⁴⁸⁾と述べている。アポストロフィーは使っていないが、eの脱落はヘルダーがこの論文をまるで話しているかのように綴った痕跡と理解できる。また文学的な文体という点では、『言語起源論』で文学作品(シェイクスピア『真夏の夜の夢』)からの引用内にアポストロフィーが用いられている(S. 98、「天地(Himm'l und Erd)」)。

3-3-4 引用符

引用符(„)は他の著作からの引用部分の「始まりと終わり」に置かれる⁽⁴⁹⁾。たとえば論敵ズュースミルヒの『証明の試み』から引用してはヘルダーが反論を加える部分を引用する。改行は初版のとおりにした。

„Wenn man annimmt, daß die Einwohner
„der ersten Welt nur aus etlichen tausend Familien
„bestanden hätten, da das Licht des Verstandes
„durch den Gebrauch der Sprache schon so helle ge=
„schienen, daß sie eingesehen, was die Sprache
„sey und daß sie also an die Verbesserung dieses herr=
„lichen Mittels haben können anfangen zu denken:
so = =)“, (S. 162)

「はじめの世界の住人がおよそ千の家族だけで成り立っていたと仮定する。そこでは悟性の光が言語の使用によってすでに明るく輝いていたので、彼らは言語が何であるかを見極めていたし、したがってこの素晴らしい手段の改良を考え始めることもできていた。そうだとすると = =)」

引用始まりと終わりだけではなく、引用文を改行するごとに行頭に引用符を置いている。これは自筆稿から第2版にいたるまで同じ方法で符号が使用されている。また、引用の終わりで引用符を綴じるときにも始まりや行頭と同じく下につけているが、これは初版までで第2版では現在と同様に上に付けられている。ちなみにこの引用最後の二重ハイフンは省略を表す。第2版ではダッシュ2個に置き換えられ、レクラム版では省略点(...)に変更された。これは校訂版による「テキストの平板化」と言わざるを得ないだろう⁽⁵⁰⁾。

3-4 日本語訳における句読法

以上のように、「生き生きとした声」や各種の休止や沈黙を表す符号を駆使したヘルダーの『言語起源論』を日本語に翻訳するのは困難を極める。特にピリオド、コロン、セミコロンの「休止」の大小や、各種ダッシュの訳し分けを日本語の印刷物で再現するのは難しい。これまで出版された訳本3種類はそれぞれの苦労や工夫の結果である⁽⁵¹⁾。

『言語起源論』初版から200周年の1972年に出版された2種類の日本語訳のうち、大阪大学ドイツ近代文学研究会訳は、「ヘルダー独特の文体に固執するよりも、むしろ日本語としてできる限り読みやすい」翻訳を目指したという⁽⁵²⁾。木村直司は、「学術的な論文であるにもかかわらず、修辭的な疑問文や感嘆文に満ちあふれ」⁽⁵³⁾ているヘルダーの文章を冷静な日本語に翻訳している。その結果、両者ともたとえば『言語起源論』最後の文の締めくくりは原文のダッシュをなくし、句点(。)に変更している。他の箇所でもダッシュを削除している部分が多い。疑問符や感嘆符も、本稿で引用した部分に関してはすべて句点に変えている。

たしかに、文章の意味を理解するという点では補助符号に拘泥するのは読解の妨げという考えもあるだろう。二重ハイフンなど日本語の句読法では通常用いられない符号もある。だが、ヘルダーには「彼の独特な句読法なしには、彼のダッシュやコロンなしには理解し難い」⁽⁵⁴⁾文章も少なくない。

また、本稿で見てきたように18世紀ドイツの句読法が文書における「声」の表現と関わるのであれば、日本語としての読みやすさの犠牲にするべきではない。明治期日本の文学者たちは西洋の言語や文学に接して日本語の新たな句読表示を模索した⁽⁵⁵⁾。句読法への意識は、読解の助けになるだけでなく、自らの文章表現を豊かにすることにも役立つだろう。

4 おわりに

ドイツ語の Interpunction を日本語にするとき一般的な訳語は「句読法」だが、日本語において具体的には「句読点の使い方」を指すのであり、「法」という表現から連想されるような厳密な「きまり」はない。『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』「符号の問題」の章で佐竹秀雄がまとめているように符号の使い方は「小学校で句読点の基本について学ぶ程度」であり、「もっぱら慣習という常識によって支えられている」のである⁽⁵⁶⁾。さらにIT時代における表現ツールでは「話しかけるように書く」ため「話すことと書

くことの中間的な性格」⁽⁵⁷⁾を帯びる。そのツールを用いた表記は絵文字も含む符号を多用した「感覚的な表記」⁽⁵⁸⁾になる。実際、オンライン授業で提出される学生たちの表記を見ていても、スマートフォンを用いているためか、日本語でもドイツ語でも符号やスペースの使い方が非常に感覚的なことに驚かされる。佐竹は「学校教育における表現指導の充実が必要」⁽⁵⁹⁾と提言しているが、それは日本語教育のみならず外国語をふくめて言語教育全般に関して言えるだろう。

本稿で参照したアーデルングは、句読法の目的を読者にとっての読みやすさだと述べていた。現代の句読法ガイドでも同じように「読み手にわかりやすくするため」と書かれている⁽⁶⁰⁾。時間に追われて手早くキーボード入力することに慣れた現代社会の我々に対して、句読法は読み手への配慮のために立ち止まることを促す。「話すように書け! (Schreib, wie du sprichst!)」を標語とし、書簡というツールの可能性の拡大を契機に、より自由な言語表現を模索した18世紀ドイツ語圏と、多様な通信メディアにより文字コミュニケーションの姿も変容している21世紀の現代に符号の問題は通底している。

註

- (1) Solomon (1990/2005), S. 31. [] 内のコンマの追加は編纂者 Solomon による。この「日記」(というよりも備忘録)の他の記述を見ると、ベートーヴェンは文法上の区切りのコンマを打たないことが多く、さらにダッシュが字句の省略や沈黙あるいは思考の記号、または文のまとまりの区切り線として極めて頻繁に用いられている。ベートーヴェン自身によるオリジナル手稿が現存しないため、Solomon は複数の筆写の際の追記や誤記の可能性も残しつつ、この作曲家の「休みなき、つねに活動状態にある精神をできるかぎりそのまま反映させるために」(p. IX) 原文の句読点や補助記号を再現しようと試みている。
- (2) 譜例は Cooper (2011), p. 27 を参考に筆者作成。その際、歌詞の表記は Solomon 版に合わせた。
- (3) Hashemi (2017), 特に S. 80-82 を参照。ドイツにおけるサアーディ受容に関するこの論考で、Hashemi はゲーテの『西東詩集』とヘルダー『みだれ草紙』について、サアーディの翻訳としてではなく作品を「借用と模倣」した例として挙げている。
- (4) Herder (1792), S. 11. 1行目で schweigen を小文字書きしていることから、名詞「沈黙」ではなく動詞の不定形「黙ること」であり、その後の大文字書きの

Schweigen も動詞の名詞化、すなわち静寂な状態としての沈黙ではなく能動的な「黙る」という行為について述べられていると判断できる。そうなると、タイトルも「沈黙」ではなく「黙すること」のほうがより適切かもしれない。

- (5) プライアントプフ版でも、Cooper (2011), p. 27の譜例にも感嘆符が用いられている。この楽譜の手稿が確認できれば、ベートーヴェン自身が付曲にあたって感嘆符に変更したかどうか確認できるが、オリジナルは失われてしまったようだ。Vgl. Clermont (2000), Anm. 12.
- (6) この項については、主として Höchli (1981), S. 236以下を参照した。
- (7) Adelung, Johann Christoph: Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuchs Der [sic] Hochdeutschen Mundart. 5 Bände. Leipzig (Breitkopf und Sohn) 1774-1786. 18世紀の著作を読むには不可欠なドイツ語辞典。
- (8) 参考文献に挙げた、*Deutsche Sprachlehre* (1781)、*Umständliche Lehrgebäude* (1782)、および *Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie* (1788) の3冊。
- (9) Adelung (1788), S. 360.
- (10) Adelung (1788), S. 364.
- (11) Adelung (1788), S. 371.
- (12) Adelung (1788), S. 372.
- (13) Adelung (1788), S. 399. 複母音を切り離して読ませるための記号。この記号の名称のみ、ラテン語書体の活字が用いられている。例示されているのは Aeneis や Phaëton など、フランス語でいうところのトレマ。
- (14) Adelung (1788), S. 403. 出版業界では「アヒルの目 (Gänseaugen)」あるいは「ウサギの耳 (Hasenöhrchen)」とも呼ばれると書かれている。現在では引用符の別名は「アヒルのあんよ (Gänsefüßchen)」。Duden Ratgeber (2014), S. 212も参照。
- (15) Adelung (1788), S. 404. たとえば „8. 9. 10“ではなく „8, 9, 10“ のようにコンマを使用することを推奨し、„im 13. Jahrhundert“ (「13世紀に」) よりも „im 13ten Jahrhundert“ と表記する方が良いとしている。
- (16) Höchli (1981), S. 249 以下も参照。
- (17) 手稿の諸段階および初版、第2版、校訂版についての詳細、また日本語訳については、ヘルダー (2017)、207～215頁を参照。
- (18) 以下、引用の後の () 内は『言語起源論』初版 Herder (1772) のページ数。ページ数が印刷されていない場合は該当ページ数を [] 内に記載する。原文の後の日本語訳は筆者による。綴り方は可能な限りオリジナルの

ままにしたが、ウムラウト (¨ではなく小さな e が a, o, u の上にある) は反映させられなかった。活字の書体やサイズは声量の大小や声色の変化を感じさせ、句読点と同じくテキストの外観的な特徴 (Physiognomie) として研究に値するが、別の機会に譲る。

- (19) ヘルダーの自筆稿はベルリン国立図書館、清書稿はベルリン・ブランデンブルク学術アカデミーに所蔵されている。詳しくは、ヘルダー (2017)、208頁以降を参照。自筆稿は本文から始まっており、清書稿でも第1・2部のタイトルページはタイプライター書きで追加されている。
- (20) フランス語原文は „En supposant les hommes abandonnés à leurs facultés naturelles, sont-ils en état d’inventer le langage? Et par quel moyens parviendront-ils à cette invention?“ Vgl. Herder (1966/1993), S. 137.
- (21) Süßmilch (1766). タイトルに内容が全て反映されるとおり、言語起源は人間にはなく、創造主である神から授業を通して受けとったという言語神授説が展開されている。
- (22) ヘルダー (2017)、57頁以下。初版では S. 61 f.
- (23) Nebrig und Spoerhase (2012), S. 28 では レッ シングの『文学書簡』において疑問符が「否定符 (Negationszeichen)」であると指摘されている。
- (24) ヘルダー『言語起源論』第3手稿 (カプセルII、フォルダ3番)、11頁裏面。ヘルダー自身も目を通した清書稿では強調下線はなくなっている。
- (25) Adelung (1782), S. 793 nach Höchli (1981), S. 239. Adelung (1788), S. 374-375.
- (26) 「言語の起源は、それが人間的である限り、それにふさわしい方法で神的である。」という印象的な一文は、清書稿の段階で追加されたものである。
- (27) Adelung (1788), S. 375. また、台詞のような直接引用の前や例を列挙するときの用法も記されている (S. 379-380)。
- (28) Duden Ratgeber (2014), S. 160.
- (29) Adelung (1788), 380.
- (30) Adelung (1788), 382.
- (31) Herder (1789), S. 10.
- (32) Adelung (1788), S. 383.
- (33) Herder (1966/1993), S. 5. このコンマに関する詳細は、ヘルダー (2017)、179頁の註1を参照のこと。
- (34) Herder (1966/1993), S. 133-134.
- (35) ヘルダー『言語起源論』第3手稿、1頁表面。
- (36) Herder ([1778]), S. 113. この文の注釈をしている Proß

は、本文では初版同様にコンマを入れているが、註ではレクラムのようにコンマを省いている。

- (37) Adelung (1788), S. 386.
 (38) Adelung (1788), S. 387.
 (39) 自筆稿の第2部の締めくくりにはダッシュはなく、清書稿で第2部と結句を#記号3つで分けたときにダッシュが追加された。たとえばズユースミルヒ『証明の試み』はピリオドで終止しているし、ヘルダーの『言語起源論』第2版とともに出版されたもうひとつの受賞論文の最後の文は感嘆符で締めくくられている。Vgl. Süßmilch (1766), S. 124, Herder (1789), S. 319.
 (40) Adelung (1788), S. 388.
 (41) Adelung (1788), S. 391.
 (42) Adelung (1788), S. 398.
 (43) Adelung (1788), S. 399.
 (44) 現在のドイツ語では emp-finden と分綴するが、アーデルングの辞書を見ても em-pfinden と分綴している例が見られる。Adelung (1793), Sp. 1449 ほか。
 (45) Herder (1789), S. 164. ズプハン版は Herder (1891), S. 100. レクラム版は Herder (1966/1993), S. 86.
 (46) Herder (1789), S. 224; Herder (1891), S. 139; Herder (1966/1993), S. 118.
 (47) Adelung (1788), S. 400 f.
 (48) Adelung (1788), S. 401.
 (49) Adelung (1788), S. 403.
 (50) Herder (1789), S. 173, Herder (1966/1993), S. 90. この省略点 (Auslassungspunkte) については Duden Ratgeber (2014), S. 30 以下を参照。校訂版による「平板化」の問題に関しては、Nebrig und Spoerhase, S. 13も参照のこと。
 (51) それぞれの日本語訳の特徴について詳しくはヘルダー (2017)、213頁以下。
 (52) ヘルダー (1972) 大阪大学ドイツ近代文学研究会訳、256頁 (訳者あとがき)。
 (53) ヘルダー (1972) 木村直司訳、212頁 (解説)。
 (54) Nebrig und Spoerhase, S. 30.
 (55) 飛田 (2002) を参照。
 (56) 佐竹 (2002)、104頁。
 (57) 同書、124頁。
 (58) 同書、123頁。
 (59) 同書、126頁。
 (60) Duden Ratgeber (2014), S. 8.

参考文献

一次資料

- [Herder, Johann Gottfried:] Abhandlung über den Ursprung der Sprache, welche den von der Königl. Academie der Wissenschaften für das Jahr 1770 gesetzten Preis erhalten hat. Von Herrn Herder. Berlin (Voß) 1772.
 Herder, Johann Gottfried: Abhandlung über den Ursprung der Sprache. In: Johann Gottfried Herders zwei Preisschriften[,] welche die von der Königl. Akademie der Wissenschaften für die Jahre 1770 und 1773.[sic] gesetzten Preise erhalten haben. Zweite berichtigte Ausgabe. Berlin (Voß und Sohn) 1789.
https://reader.digitale-sammlungen.de//de/fs1/object/display/bsb11260344_00005.html (最終アクセス日2020年8月29日)
 Herder, Johann Gottfried: Zerstreute Blätter. Vierte Sammlung, Gotha (Ettinger) 1792.
<https://books.google.de/books?id=ZZU6AAAacAAJ&hl=de&pg=PP7#v=onepage&q&f=false> (最終アクセス日2020年8月27日) Für den Hinweis bin ich Herrn Rolf Röper der Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen sehr dankbar. Google ブックスで検索すると、このページが『みだれ草紙』第4集ではなく第3集に含まれているかのような書籍データが含まれるので注意されたい。
https://books.google.co.jp/books?id=sQk0-wAEODQC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (最終アクセス日2020年8月27日) 表紙から目次までは第3集だが、本文は第4集。デジタル化された一次資料に簡単にアクセスできる時代にはなったが、利用者にはより一層批判的かつ慎重な判断が必要だという一例である。
 Herder, Johann Gottfried: Abhandlung über den Ursprung der Sprache. In: Sämtliche Werke. Bd. 5. Hrsg. v. Bernhard Suphan, Berlin (Weidmann) 1891.
 Herder, Johann Gottfried: Abhandlung über den Ursprung der Sprache. Hrsg. v. Hans Dietrich Irmscher, Stuttgart (Reclam) 1966/1993.
 ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー『言語起源論』大阪大学ドイツ近代文学研究会訳 (法政大学出版局) 1972年。
 ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー『言語起源論』木村直司訳 (大修館書店) 1972年。
 Herder, Johann Gottfried: Über den Ursprung der Sprache. Text, Materialien, Kommentar. Hrsg. v. Wolfgang Proß, München, Wien (Carl Hanser) o. J. [1978].

- Herder, Johann Gottfried: Über den Ursprung der Sprache. In: Ders. Werke. Bd. 1. Frühe Schriften 1764–1772. Hrsg. v. Ulrich Gaijer, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1985, S. 695–810.
- Herder, Johann Gottfried: Über den Ursprung der Sprache. In: Ders. Werke. Bd. 2. Herder und die Anthropologie der Aufklärung. Hrsg. v. Wolfgang Proß, München, Wien (Carl Hanser) 1987, S. 251–357.
- ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー 『言語起源論』 宮谷尚実訳 (講談社) 2017年。
- 二次資料**
- Süßmilch, Johann Peter: Versuch eines Beweises, daß die erste Sprache ihren Ursprung nicht vom Menschen, sondern allein vom Schöpfer erhalten habe, in der academischen Versammlung vorgelesen und zum Druck übergeben von Johann Peter Süßmilch, Mitglied der Königl. Preußischen Academie der Wissenschaften. Berlin (Buchladen der Realschule) 1766.
- Johann Christoph Adelungs Deutsche Sprachlehre. Zum Gebrauch der Schulen in den Königl. Preuß. Landen. Berlin (Voß und Sohn) 1781.
https://books.google.co.jp/books?id=3iJWAAAAYAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (最終アクセス日2020年8月28日)
- Adelung, Johann Christoph: Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache, zur Erläuterung der Deutschen Sprachlehre für Schulen. 2 Bde. Leipzig (Breitkopf) 1782.
<https://visuallibrary.net/urn:urn:nbn:de:s2w-568> (最終アクセス日2020年8月28日)
- Adelung, Johann Christoph: Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie, nebst einem kleinen Wörterbuche für die Aussprache, Orthographie, Biegung und Ableitung. Frankfurt und Leipzig [o.V.] 1788.
https://reader.digitale-sammlungen.de/de/fs1/object/display/bsb11104959_00005.html (最終アクセス日2020年8月28日)
- Adelung, Johann Christoph: Auszug aus dem grammatisch-kritischen Wörterbuche der hochdeutschen Mundart. Erster Theil, von A–E. Leipzig (Breitkopf und Compagnie) 1793.
- Ludwig van Beethovens Werke, Serie 23: Lieder und Gesänge, Nr. 256. Leipzig (Breitkopf und Härtel) [n. d. [1864]], Plate B. 256, S. (185)10.
- Höchli, Stefan: Zur Geschichte der Interpunktion im Deutschen. Berlin, New York (de Gruyter) 1981.
- Garbe, Burckhard (Hrsg.): Texte zur Geschichte der deutschen Interpunktion und ihrer Reform 1462–1983. Hildesheim (Olms) 1984.
- Clermont, Susan: A Beethoven Sketch for the Puzzle Canon "Das Schweigen," WoO 168. In: The Moldenhauer Archives - The Rosaleen Moldenhauer Memorial. 2000
<https://www.loc.gov/collections/moldenhauer-archives/articles-and-essays/guide-to-archives/beethovens-das-schweigen/> (最終アクセス日2020年8月27日)
- 佐竹秀雄「符号の問題」『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』(明治書院) 2002年、104～126頁。
- 飛田良文「西洋語表記の日本語表記への影響」『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』(明治書院) 2002年、58～84頁。
- Solomon, Maynard: Beethovens Tagebuch 1812–1818. Bonn (Verlag Beethoven-Haus Bonn) 1990/2005.
- Abbt, Christine, Tim Kammasch (Hrsg.): Punkt, Punkt, Komma, Strich? Geste, Gestalt und Bedeutung philosophischer Zeichensetzung. Bielefeld (transkript) 2009.
<https://library.oapen.org/bitstream/id/5f5ea2a4-2708-47a4-9cdf-aal193379a78/1007581.pdf> (最終アクセス日2020年8月28日)
- Cooper, Barry: Beethoven's use of silence. The Musical Times. Spring 2011, Vol. 152, No. 1914 (Spring 2011), pp. 25–43.
- Bredel, Ursula: Interpunktion. Heidelberg (Winter) 2011.
- Nebrig, Alexander, Carlos Spoerhase: Für eine Stilistik der Interpunktion. In: Die Poesie der Zeichensetzung: Studien zur Stilistik der Interpunktion. Bern, Berlin u. a. (Peter Lang) 2012, S. 11–31.
- Duden Ratgeber. Handbuch Zeichensetzung. Berlin (Duden) 2014.
- Hashemi, Faranak: Saadi in der deutschen Geistesgeschichte. In: Spektrum Iran. 30. Jg. Nr. 2-2017, S. 71–82.
<http://spektrum.irankultur.com/wp-content/uploads/2017/06/Saadi-in-der-deutschen-Geistesgeschichte1.pdf> (最終アクセス日2020年8月26日)
- 図版出典**
- 図版 1 Herder, Johann Gottfried: Zerstreute Blätter. Vierte Sammlung, Gotha (Ettinger) 1792.
<https://books.google.de/books?id=ZZU6AAAACAAJ&h>

l=de&pg=PP7#v=onepage&q&f=false (最終アクセス日
2020年8月27日), S. 11.

図版2 ヘルダー『言語起源論』第3手稿、1頁表面。
ベルリン国立図書館所蔵。

Nachl. Herder Ka. 2, Mp. 3, Bl. 1r.

Staatsbibliothek zu Berlin – Preußischer Kulturbesitz,
Handschriftenabteilung

Die Abbildung wurde mit der freundlichen Genehmigung
von der Handschriftenabteilung gestattet, wofür ich
mich recht herzliche bedanke.

本研究は JSPS 科研費19K00527の助成を受けたものです。